

《自主研究》

産後ケアにおける助産技術の教育強化  
～褥婦のセルフケア能力を高めるケアに焦点をあてて～

五十嵐由依子 \*1 鈴木幹子 \*1 稲荷陽子 \*1 杉田理恵子 \*1 玄番千恵巳 \*1

Enhancing Education on Midwifery Skills in Postpartum Care  
～Focusing on Care That Enhances the Self-care Skills of Postpartum Mothers～

Yuiko IKARASHI, Mikiko SUZUKI, Yoko INARI, Rieko SUGITA, and Chiemi GENBA

1. 背景と目的

近年、産後うつや虐待の問題は増加傾向にあり、その予防対策として産後ケア事業が行政や民間で展開されており、産後ケア事業を担う専門職者として助産師に期待が寄せられている。現代の母親の多様なニーズに応じた産後ケアを提供するためには、助産師の教育機関における産褥期ケアの基礎教育強化が重要である。しかし、助産師教育に関する先行研究では分娩介助の知識や技術に関連した研究が多くを占め、産褥期に焦点をあてた研究は少ない。令和元年、厚生労働省の下で構成されたワーキンググループ「看護基礎教育検討会報告書」<sup>1)</sup>では、産後うつ等の周産期におけるメンタルヘルスや虐待防止等への支援について、産後4か月程度までの母子のアセスメント能力強化が重要であるとし、現行の単位を引き上げる指定規則の改定が示された。同報告書における履修内容の「産褥期の診断とケア」に「産褥経過に伴う生理的変化を診断し、予防的ケアを行う」が追加され、高いコミュニケーション能力の習得と今後の経過を予測するアセスメントや診断の臨床推論能力が必要であることが強調されている。また、令和3年4月1日には、「母子保健法の一部を改正する法律」が施行され、「市町村は出産後一年を経過しない女子及び乳児につき、産後ケア事業を行うよう努めなければならない」とあり、助産師教育における産褥期の教育内容の充実と発展が期待され、助産師養成機関としての責務は大きい。

本研究では、助産学生のコミュニケーション能力と臨床推論能力の向上を図り、褥婦のセルフケア能力を高めるケアに繋がる教育内容の検討を行う。助産師教育における「褥婦のセルフケア能力を高めるケアに対する教育の強化」は、助産技術の向上につながり、より質の高い産後ケアの提供に役立つと考える。

本研究は2年計画で、令和3年度は、褥婦のセルフケア能力を高める産褥期ケアの課題に沿った場面設定のシナリオと評価基準を作成し、模擬褥婦に対して助産ケアを実践

する演習を行い、その結果を分析する。さらに、演習後と助産学実習終了後に助産学生へのフォーカスグループインタビューを実施し分析をする。令和4年度は、令和3年度の結果を基に教育方法を再検討して実践につなげ、産後ケアにおける助産技術の教育効果の評価を実施していく。

2. 研究方法

1) 対象者及び調査期間

大学における助産師課程学生6名、2021年7月～12月。

2) 研究デザイン

質的記述的研究デザイン。

3) データ収集方法

(1) 助産技術演習の概要

助産学実習前の学生を対象に、褥婦のセルフケア能力を高める産褥期ケアの課題に沿った場面設定の教材を作成し、助産技術演習を実施した。産褥期の助産技術を客観的に評価するため、ブルームのタクソノミーの3領域【認知領域・精神運動領域・情意領域】を指標とし評価基準(図1)を独自に作成した。

7月の助産技術演習では、助産学生に妊娠期から産後3日目までの母子の情報を紙面で提示し、産後3日目まで母子の健康状態のアセスメントとセルフケア能力を高める支

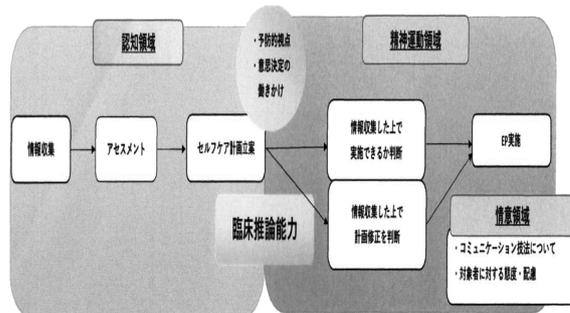


図1 評価基準(簡略化したもの)

\*1 東京家政大学 (Tokyo Kasei University)

援の立案をしてもらった。その後、模擬褥婦に対して立案した計画を基に、健康状態の観察とセルフケア能力を高める支援を実施してもらった。模擬褥婦への観察やケア実施については、情報収集に必要な観察技術とコミュニケーション技術、アセスメントに基づくケアの実施状況を分析するために動画で撮影した。

#### (2) フォーカスグループインタビュー

産褥期ケアの技術演習終了後の翌日（7月）と助産学実習終了後（12月）の2回、研究参加者にインタビューガイドを用いてフォーカスグループインタビューを実施した。

### 4) データ分析方法

#### (1) 助産技術演習

事例の母子について学生が記述したアセスメント用紙と褥婦のセルフケア能力を高める支援について、学生が立案した助産計画を、教員があらかじめ想定して作成した解答例を用いて比較検討した。学生が模擬褥婦に対して実施した助産ケアを撮影した動画に関しては、作成した評価基準を用いながら分析した。ブルームのタキソノミーの2領域【精神運動領域・情意領域】が適正に評価ができるよう、複数の教員で繰り返し見直ししながら分析した。

#### (2) フォーカスグループインタビュー

ICレコーダーで録音したフォーカスグループインタビュー内容を分析した。録音内容を逐語録に起こし、「褥婦のセルフケア能力を高める助産技術」に関する語りを抽出し、褥婦のセルフケア能力を高めるケアに対する助産過程に焦点を当て分析した。

### 5) 倫理的配慮

研究対象である助産学生には、研究の目的や方法について書面と口頭で説明した。研究協力は自由意思に基づくものであり、いつ中止・撤回しても構わないこと、研究協力を断っても学業成績に影響しないこと、不利益が生じないことを説明した。また、得られたデータは、研究以外の目的に使用しないこと、個人が特定されないように、パスワードを管理しプライバシーの保護を行うことを説明した。

本研究は東京家政大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（番号：SK2021-05）。

## 3. 結 果

### 1) 研究参加者の概要

6名は、全員20代女性で看護系大学における助産師課程の学生である。

### 2) 助産技術演習

#### (1) 助産過程の記録の分析結果

学生の助産過程の記録と教員があらかじめ想定して作成した解答例を比較検討した。学生は紙面上の事例の妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の情報から、産後3日目の母子の心身の健康診断につながる情報を収集し、身体面・心理面・社会面を統合して対象者を理解しようとしていた。しかし、アセスメントには根拠の記載が不足していた。セルフケア能力を高める計画立案に関しては、対象者とのやり取りを想起して、個別性を考慮した具体的な内容をあげていた。

#### (2) 演習動画の分析結果

学生は、模擬褥婦に対して、情報収集のために事前に用意した質問や観察項目を実施することに集中し、目の前の模擬褥婦の言動や表情の変化を見逃している場面がみられた。また、模擬褥婦とのコミュニケーションのやり取りの経過から多角的に情報を収集することはできていなかった。このことから、臨機応変にコミュニケーションをとりながら情報収集する能力は未熟であることが分かった。そのため、立案したケア計画を修正するなど柔軟に対応することが難しく、一方的な指導になっている場面がみられた。

特にコミュニケーション技法では、学生間に差があり、想定外の模擬褥婦の言動に、すぐに応じようとする学生もいれば、戸惑い応じることができない学生もみられた。そのため模擬褥婦とのやり取りの中でその場で明らかになった新たなニーズに対する計画の修正までには至らなかった。永井<sup>2)</sup>の報告においても、学生の対象者とのコミュニケーション能力不足、またコミュニケーションと観察を両立させることの困難を明らかにしている。以上のことから、対象者に対するコミュニケーション能力は、対象者のアセスメントに必要な情報収集を短時間に収集し、計画実施につなげるために不可欠な技術であるため、早急な対応が必要であることが示唆された。

#### (3) フォーカスグループインタビューの分析・結果

助産技術演習後に実施した1回目のフォーカスグループインタビューを助産の展開過程に沿って、また、本研究のキーワードであるコミュニケーションと臨床推論に注目して分析した。情報収集では、下肢の「浮腫」や乳頭の「痛み」など症状や訴えから健康問題や健康課題に関する情報を得ていた。学生は、浮腫や痛みなどの問題として明確な点をとらえていく問題志向型の考え方が先行しているようであった。しかし、紙面上の情報だけでなく、模擬褥婦とのコミュニケーションからも必要な情報を得て、問題ではなく課題を見出そうとしていた。また、退院後のセルフケアを意識して情報を得ようとしていた。アセスメントでは、

対象者の性格や退院後の生活を考慮し、セルフケアが実践できるようになることを意識していた。計画実施では、あらかじめ計画してきたことを優先していたこと、計画以外のことにすぐに対応できなかったことが述べられていた。コミュニケーションでは、模擬褥婦の言葉だけをとりえるのではなく、表情も意識してとりえるようにしていたこと、模擬褥婦の言葉を繰り返して、模擬褥婦の思いを確認していたこと、ポジティブな会話になるようにしていたことが述べられていた。しかし、双方向的なコミュニケーションになっていなかった点や他の人のコミュニケーションの取り方を参考にしたいなど、今後の課題が述べられていた。臨床推論については、退院後の生活を想定し、対象者の性格やキーパーソンである夫との関係を考慮し、セルフケアの計画を考えようとしていた。インタビュー結果から、学生は紙面上では必要な情報を収集してアセスメントし、対象者のセルフケアについての計画を立案していた。しかし、実際、模擬褥婦にケアを実施する際、予測していなかったことに十分な対応が取れず、困難を感じていたこと、一方的に計画してきたケアを進めてしまったことを認識していた。学生の対象者に対する態度面では、対象者の性格などの特徴を推測し、配慮するタイミングや学生がとるべき態度などについて考慮しようと努力していることがわかった。学生は、助産学生として、産後の母子の経過や心理的・社会的背景を理解し、助産過程を展開しようとする意欲や姿勢があることが分かった。

#### 4. 考 察

臨床推論とは、対象に生じた臨床的事象（症状や徴候、訴え等）からを正しく判断・解釈し、対応を決定するためのプロセスを経る能力を獲得することであり、その過程ではコミュニケーション能力が重要となってくる。助産におけるコミュニケーション能力には、コミュニケーションが取れるということだけでなく、カウンセリング技術と対象と良好な関係を築ける能力が必要不可欠である。望ましい助産師教育のコアカリキュラム<sup>4)</sup>の「助産師に求められる基本的な資質と能力」におけるコミュニケーション能力の学修目標には、傾聴・共感、感情の支持、意思決定の支援、個別的な心理的社会的背景を理解した上での信頼関係の構築が掲げられている。

今回の演習で、コミュニケーション技法については、学生自身が助産技術の動画を見て振り返ることにより、自分の声の特徴や話し方が相手にどのように影響するのかを客観的に評価できていた。また、対象者との会話でキャッチボールがとれておらず、一方通行になっているなど、コミュニケーション技法についての課題を見出していた。

日々変化する産褥期の助産ケアには、臨床推論能力（体

系的・分析的アプローチで診断する思考過程）が求められる、そのためにコミュニケーション技法が重要となってくる。

助産師のコア・コンピテンシー<sup>5)</sup>の「専門的自律能力」における「コミュニケーション（対人関係）」には、①対象のニーズを身体的・精神的・社会的側面から把握するように努められる②対象を一個人として尊重し、傾聴・共感的な態度で接することができる③対象中心のサービスであることを認識して接するように努められる④言語的・非言語的コミュニケーション技法について理解できる⑤支援を受けながら、対象が納得できる説明を行い、同意を得られる⑥守秘義務を厳守し、プライバシーに配慮できる⑦5W1Hを踏まえてメモをとり、正確に伝達できるという7つの内容がある。今回の演習では、演習の様子を撮影した動画を学生がみて行ったデブリーフィングにより①～③はできていたことがわかった。しかし、それ以外には課題がみられた。

中澤<sup>3)</sup>らは、シミュレーションによる教育プログラムは、助産技術の獲得と知識の獲得、コミュニケーション技術の向上が期待できることを示唆しており、特に助産におけるコミュニケーションでは、臨床推論能力やカウンセリング技術を高められるシミュレーション教育の検討が必要である。今回、ブルームのタキソノミーを用いて作成した評価基準を使用したことで、助産技術の中でも評価が難しいとされる助産師としての態度やコミュニケーション技法、臨床推論能力について、学生の現状が把握でき、さらに具体的な課題を見出すことができた。今後は、目的に沿った適切なシナリオに基づくシミュレーション教育をプログラムに導入するなど効果的な演習方法を検討していきたい。

また、より産褥期の助産ケアの評価が適正にかつ効果的に測定できるよう、評価基準の改良を実施していきたい。

#### 5. ま と め

学生は紙面上での事例に対して、根拠が不足している部分はあったが、褥婦のセルフケア能力を高める計画立案し、個別性を考慮した具体的な指導について記述できていた。しかしながら、模擬褥婦に対してケア計画を実施する場面においては、情報収集に必要なコミュニケーション技法や多角的に情報収集する能力が未熟であることが明らかになった。

#### 6. 令和4年の予定

現在、助産学実習後に実施した2回目のインタビューを、褥婦のセルフケア能力を高めるケアについて、実習前の演習での経験が助産学実習でどのように活かされたのか、また、コミュニケーション技法やアセスメントに関す

る課題がどの程度達成できるようになったのかを焦点に分析中である。

この結果を基に、来年度の産褥期の授業内容を再検討して実施し、教育効果の評価を実施・強化につなげていく。

## 文 献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書（2018）.
- 2) 永井紅音：助産師学生の産褥期実習における実習目標達成の過程で生じた困難，母性衛生，第60巻4号，622-633（2020）.
- 3) 中澤紀代子，定方美恵子，高島葉子：助産師基礎教育におけるシミュレーション教育の現状と課題に関する文献レビュー，日本シミュレーション医療教育学会雑誌，第6巻，71-78（2018）.
- 4) 公益社団法人全国助産師教育協議会：望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム（2020）.
- 5) 公益社団法人日本看護協会：2019年度改訂助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）活用ガイド（2019）.
- 6) 阿部幸恵，藤野ユリ子：看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入，日本看護協会（2018）.